綜　　説

健康管理に対する理念の転換

富山県農村医学研究会
会長　豊　田　文　一

医療の主体性は医師にあるという観念は、永い間固定されてきていた。成程わが国では古語で医師を「くすし」または「くすりし」とよんだが、くすりによって病気を治療するという意味でこの言葉が用いられた。漢字の「医」は「治療」の意味である。今日欧米で用いられている medicine（英米）medicine（佛）Medizin（独）ということばは、ラテン語 medri に由来するもので、その意味は「治療する」ということである。従って医療の主体は医師であることも当然のことと思われる。

そこで健康の主体性はどこにあるか。これはそれぞれ個人に帰属している。ただこれを保つために健康管理が必要である。この健康管理も医師の責任でやらねばならないし、その責任も医師であるという理論である。しかし、その指導の面では医師が関与する所が多いかも知れないが、これはそれぞれの個人、広くいえば国民それ自体の共同責任であると私は思う。ただ国民は、ことに健康人は健康の有難さを十分自覚していない。一旦病気をして始めてその有難さを知る。健康でさえあれば、何もいらぬという気持は、永い間病床に臥すもののみが、等しく体験する所であろう。印度の医典「チャラカ本集」には「無病は、これ善業、利達、愛慾、解脱の最上根本なり」と述べている。これは健康は最大の幸福であることを如実にあらわした語といえる。

私どもは、健康とは何かと問われると、漠然と病気でないことが健康であるとの答がかえってくるようである。しかし私どもはもっと大きな理念にたって健康を取り上げる必要がある。健康を定義づけるのにＷＨＯ（世界保健機構）では「健康とは単に身体に病気がないとか、身体が弱くないというだけでなく、肉体的にも、精神的にも、社会的にも、完全に調和のとれたよい状態である」という。これは全世界を通じて承認されている。

これを起点とする個人の健康は、その人の幸福や利益の上で大切であるばかりでなく、周囲の人々、ひいては社会全体の健康のため重視されねばならない。私は医学教育に従事して反省させられることは、わが国の医学は病気を中心として健康を考えることを教えたが、これは医学教育自体の一つの大きな欠陥であり、これからは健康を中心として医学を進めてゆかなければならない。また健康管理も、今までのような病気を中心としたものでなく、健康であるうちに健康を守る方策に転換すべきものと思う。

昨年、熊本で開かれた日本農村医学会総会、長野県での第１回アジア農村医学会議でも、多数の意見が、今までの健康管理に批判を加え、健康を中心とした管理への方途を示唆していたことは、新しい波紋として受けとめられた。

しかし、このことは極めて地味な仕事で、

華かさがないようである。富山県農村医学研究会も設立5周年を迎えようとしている。幸いに会員各位の努力によって、農民の健康管理について微力をつくし、ささやかではあるが、成果をあげてきている。ただ今年は石油危機を端緒としての社会情勢の大きな揺れ動きは避けられないだろう。ひいては農村の経済状況にも著しい変動の起きることは必至とみてよい。このなかで農民の健康を守ることは、私どもの使命であり、さらに新しい考え方で対処せねばならない。

由来わが国では病気に対して、制度の上からの施策が進められているが、健康そのものを守る面では、人的、財政的の処理は極めて薄い。これはもちろん医療行政の立ち遅れも否めないが、根本的には医学教育の仕方にも問題があり、医学教育にたずさわる人々とともに反省してもらいたい。

健康は人類にとって宝である。このためにも、社会全体の健康と個人の健康を切りはなして考えないように、あらゆる努力と施策を傾注してもらいたい。

以上私は健康管理のあり方に対し、私の見解を披瀝したが、予想される経済的変動が、農村に如何なる影響を与えるか、さらに健康管理についても、新しい理念で対処すべきであろうと考えられ、会員各位とともに農民の健康を守る運動を展開したいと思っている。